

共に

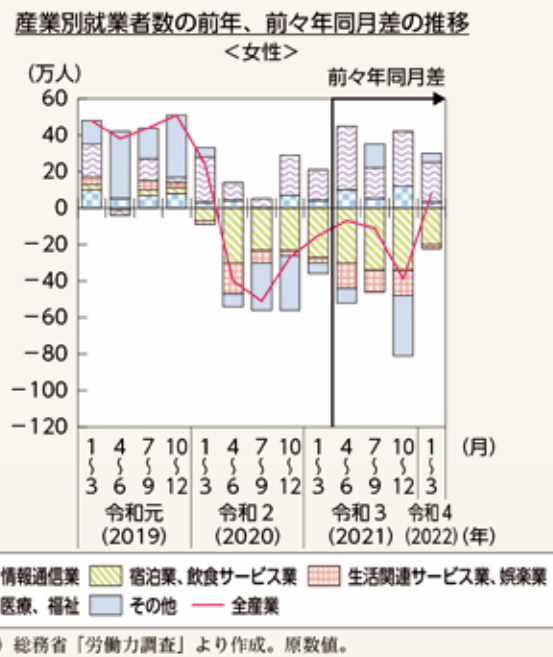
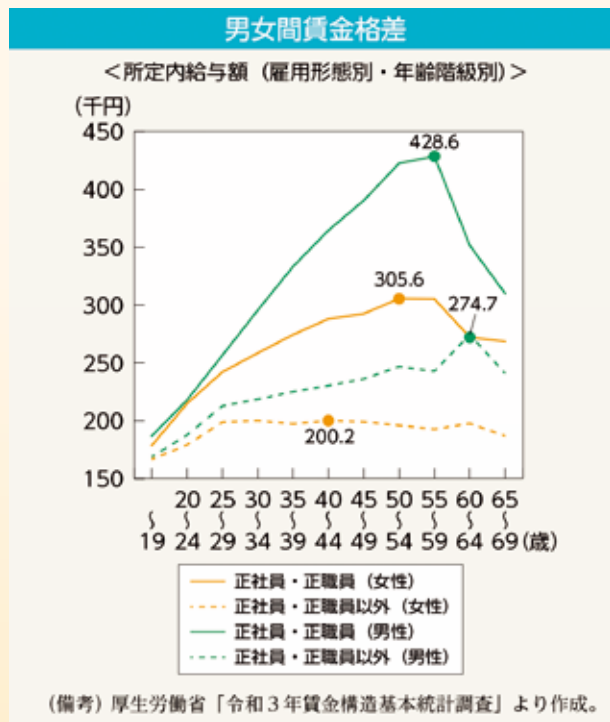
特集

誰一人取り残さない社会のためには ～長期化するコロナ禍で 安心して共生する社会を～

令和4年度 男女共同参画週間キャッチフレーズ
「あなたらしい」を築く、「あたらしい」社会へ
男女共同参画週間(毎年6月23日～29日)に合わせて選定されています

新型コロナウイルスの感染拡大は収束する兆しが見えぬまま3年目となり、世界経済に重い影を残しました。世界経済フォーラム(WEF)は男性より女性に大きな打撃を与え、ジェンダー格差を拡大したと指摘しています。

特に景気回復の遅れている日本では女性の雇用を直撃しました。感染症対策として人や物の移動を制限した結果、女性の就職率の高い飲食業や生活関連サービス業は大きな打撃を受けました。中でも非正規雇用者が大きく影響を受けており、結婚・出産による離職などのため非正規雇用に占める女性の割合が多いことから多数が雇用を失う結果となっています。その中にはひとり親世帯も少なくないようです。男女格差は確実に広がっています。



コロナ禍での失業や収入減などで、支援を必要とする女性や子どもが増えている現状は塩尻市も例外ではありません。そんな不安や困難を抱える女性や子どもたちに寄り添い、支援し応援をしている団体の創設者お二人にお話を伺いました。

市民目線で私たちができることはなんだろうか？コロナ禍を乗り越え、自立し、未来に向かって女性も子どもたちも一人一人が輝くにはどのように行動すべきなのでしょう。一步踏み出すためのテーマにいたしました。

(編集委員 吉江 令子)

男女がともに活躍できる社会へ



令和4年度 塩尻市
「豊かな心を育む市民の集い」を開催します

塩尻市では、人権意識の向上と、男女共同参画社会の実現を目指し意識改革に努めています。

「塩尻市手話言語条例」が本年四月から施行となり、言語としての手話が注目されています。この条例は、手話の役割や大切さをより多くの市民に知っていただき、すべての人が互いに尊重し合い、心豊かに共生する社会を目指しています。

そこで、互いにコミュニケーションがとれる住みやすい社会をテーマに、地域の人々の人権を再認識し、人を大切にする心を育てて行くために、「豊かな心を育む市民の集い」を開催します。

○期 日 令和4年12月3日(土)

午後1時30分～4時(開場午後1時)

○場 所 塩尻総合文化センター(講堂)

○主 催 塩尻市教育委員会

○内 容

(1) 中学生人権作文コンテスト表彰及び朗読発表

(2) 人権擁護委員会塩尻部会活動報告

(3) 人権啓発講演会

演題：「手話への理解を深め、互いに人格と個性を尊重し合う共生社会の実現」

講師：群馬大学共同教育学部

教授 金澤 貴之さん

○託 児 1歳以上から未就学児までのお子様を対象。無料で託児できます。(要予約)

○入場無料：(予約不要)

※手話通訳及び要約筆記が付ききます



おすすめブック(書籍)紹介

パパの家庭進出がニッポンをかえるのだ！
ママの社会進出と家族の幸せのために

NPO法人フローレンス代表 前田 晃平 著 光文社

信濃毎日新聞「パパが拓く新時代」の筆者。日本は、先進国有数の「親子に冷たい国」でもある。育児を取って筆者が初めて気づいた「日本の世の不均衡と子育て世代の生きづらさ」を豊富なデータと実体験を交えてわかりやすく綴る。長時間労働男性育休・夫婦間の不平等などを考える機会となる冊。

くまのトーマスはおんなのこ
ジェンダーとゆづじょうについてのやさしいおはなし

ジェシカ・ウォルトン 著 かむむらあきこ 訳 ポット出版プラス

女の子になりたいと悩んでいたティディベアのトーマス。それを打ち明けられた親友エロールの返事は「大事ななのは君がぼくの友だちだつてこと」だった。筆者の父が、女性に性別移行したことから、わが子に読んで聞かせるトランスジェンダーをテーマにしたものをと願って制作した絵本。

つながり続けることも食堂
多様性と自発性に手応え、渾身のルポルタージュ

社会活動家 NPO法人むすびえ理事長 湯浅 誠 著 中央公論新社

コロナ禍にも負けずに広がり続けていることも食堂。人間関係が希薄になった無縁社会の中で、誰にでも開かれ、地域の新たな多世代交流拠点として人々をつなぐ。現代のあらゆる層にとつての居場所として注目。孤立無援を減らす可能性がある。

女性相談案内

電話相談・面接相談

【家庭内や職場等の人間関係のお悩みなど】
お気軽にご相談ください

月曜日～金曜日 午前9時～午後5時

☎0263-54-0783(直通)

※女性以外の方からの相談も対応します

編集後記

長期化するコロナ禍、活動方法も変更を迫られ様々に創意工夫を凝らして活動する様子をNPO法人のお二方から伺いました。信州子ども食堂ネットワークへと、拡大発展に尽力され、みんなで助け合う社会づくりを念頭に活動してきた青木正照さん。県下通学区ごとに子ども食堂ができれば、子どもだけでなく地域のあらゆる人たちの居場所にもなる…という言葉が耳に残りました。中村小太郎さんからは、学生起業家、就職、そして米作りの実践が語られました。フードロスがなくすることを目標に、思いがけない発想の転換を実行に移していく話に引き込まれました。

あなたらしく、わたしらしく、一人一人が輝きたいと願います。今、私たちは、未来が明るくあるように願い、持続可能な活動に取り組んでいます。世界共通語ともなっているMOTTAINAI(もったいない)は、支え合いの精神を生みます。「もったいない」だから、使ってくれてありがとう(差し上げてうれしい)と、譲ってくれてありがとう(もらってうれしい)は、双方に役割があるのです。譲る側だけが役割を果たしているのではなく、もらうことも地域の一人一人としての役割なのです。

そういう気持ちが互いに支え合う社会をつくる意識に変わっていくのではないのでしょうか。それをつくっていくのは、わたしでもあり、あなたでもあります。そして地域全体でもあるはずです。一人一人の立場が違うからこそ、できる人ができるときにできることをやるという視野を広げていきたいと強く感じています。

(編集委員 横山 眞一)

誰一人取り残さない社会のためには

～長期化するコロナ禍で 安心して共生する社会を～



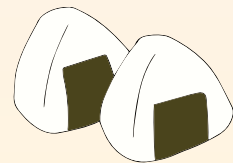
えんしょく(NPO申請中)

中村 小太郎 さんに伺いました。

どんな願いをもって活動されていますか

男は当てにするな!男女雇用機会均等法よりも、女性が起業しやすい塩尻市になるといいと思います。自分が大学生のころ、学生起業家として活動した経験を活かし、起業のためのコツやノウハウは伝えられます。創業して雇い主になれば自分で給料を決められる。『自分の足で立つ』人がひとりでも増えるように願って応援したいです!!

個人の能力は無限
創業する女性の
背中を押したい



活動から感じていることを教えてください

『個人の能力は無限』であり『絆』や『縁』も大事にしたいと感じています。

“絆♡エールの会”を立ち上げ、

“もったいない運動塩尻”の活動の一環として吉田東公民館と北小野支所で2か月に1回おさがり会を開催していますが、生理用品を配るとすぐに無くなってしまう現実を多くの方に知って欲しいです。

格差増大が顕在化しているコロナ禍、どんな支援が必要だと感じていますか

私は人道支援しかできませんが、行政の支援は重要です!

ひとりで食べるのではなく、何かの縁で一緒に食卓を囲む絆を大切にしたいと思っています。この地域から、“置き去りにしない”精神で活動を進めていきたいです。



誰もが安心して暮らせる社会を目指し、私たちにどんなことができるでしょう

借りられる農地を探して『自給自足』を始めること、創業を含め『自分の足で立つ』ことを意識していく、農地を複数人で借りるために『女性で組合結成』をしていくこと、そして『学歴重視の社会を変える』こと。学力による格差を意識させないためにも、まずは履歴書の学歴欄を無くすことを提唱したい思いがあります。子育てをしている女性の自己肯定感が低いことを感じます。学歴よりも、何をやってきて、何ができるのかを大事にして、スキルを出し合っていくことで、住みやすい社会になるのではと思います。

(編集委員 横山 裕美)



NPO 法人ホットライン信州

専務理事 青木 正照 さんに伺いました。

主にどんな活動をされていますか

24時間365日、電話での無料相談、同行・生活支援を行い、企業や個人からの食料品や生活必需品の寄贈品などで生活困窮者支援を実施しています。子ども食堂の運営に携わり、20歳すぎた方が、中学生の頃からのひきこもりを改善した例もあります。

どんな願いをもって活動されていますか

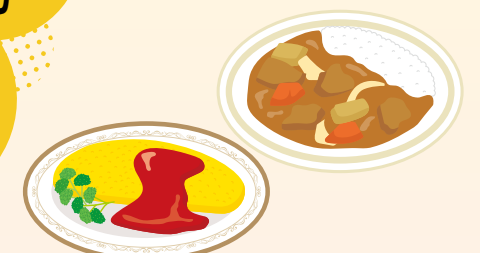
相手の気持ちが分かり、立場にたった思いやりが必要だと思います。考え方が多様化しているので、こうでなければとの先入観を取り払うことが大事です。子ども食堂は、協力者みんなで寄付されたものからメニューを決めています。離婚・DV・親権問題・経済的困窮等、女性と子どもは弱い立場にありますが、一緒に活動することで互いに認め合いながら、知恵を出し合い協力関係で運営しています。

特に、幼少期に経済的ダメージや精神的ストレスが大きいと、つまずきやすく、社会での適応が難しくなることを感じています。子ども食堂は生活困窮者だけではなく、地域のあらゆる人たちが気軽に集まる場を目指しています。

活動から感じていることを教えてください

最初の頃の子ども食堂は、貧困のイメージがとて強く、行きたくても行けない人もいました。地域で自分の子どもだと思って育てることが必要ではないでしょうか。ひとり親家庭はわが子に責任を持つことは大切ですが、みんなに協力してもらおうと気が楽になるでしょう。困ったときは迷わず声をあげることができればと思います。

互いに認め合う
みんなで協力
地域で
育てる



格差増大が顕在化しているコロナ禍、どんな支援が必要だと感じていますか

コロナ禍で、コミュニケーションが取りにくく、つながりが希薄になっています。そのような中で、物価高騰により、生活必需品や食料の援助を求める声も多いです。SDGsの取り組みと合わせて、環境に良い食材運用をしています。企業で商品の入れ替えなどで不要になったもの、*フードドライブや農家などで余った食料品を有効利用しています。物資をドライブスルー方式で配布することもあります。

*フードドライブ:各家庭で余った食品を集め学校や職場などに持ち寄り、それらを取りまとめた専門の団体や地域の福祉施設に寄付する活動

誰もが安心して暮らせる社会を目指し、私たちにどんなことができるでしょう

みんなが安心して暮らせる地域共生社会づくりのために、生活困窮者支援の取り組みがより求められています。物資などは内容により直接届けるなど、できることをできる範囲で、無理のないことに参加していくという姿勢です。不要品であっても、フードドライブボックスを設置すればそちらに入れてもらえる、そんな取組が広がるといいと思います。支援活動が発展していくように必要な方に情報提供できるとよいと思います。みんなが、お互いをサポートできる社会でありたいです。

(編集委員 小松 洋子)